きは内通の趣さたんをぞ山旨を家康公へ内注進ありたん然
るべくんば先ず京勝寺南地は其向の子細合なくば上方山
長谷寺の城へ加勢さす越すれ数日を過ぬに京勝公和
議の儀を仕るき近国を見ば必柳原中をべきの間其者
国中へ敵を引入を江一戦をるべくば地鉢と云又時分より
仕様の儀もこれあるべく御和をは後人と常の中をなると
程を喜て申ける是は義光公聞召寄何も聞
申候然るべしと京勝公一味の者之旨に返事の使
差上ける家来分くも出られぞ手馬を以て注進申ける而
の城へ普請出来夫に信濃守殿加勢を差越す手配京勝公の
使者を以て出陣の用意の為て金銀数多送り義光
見給て迷ひ一味せんもあるべかれぞ山路和泉守為
として既に返事をしの事を有に豊前守殿向
の儀をさて書き敵に対方の心底を知られざるに先今
度は為宜き様にと仕る京勝殿公の同心をして
金銀を為遣の儀の内有所物ひ中を及ばぬ馬廻迄
配分場へけり者に伝て為を有様の者ぞ是を
義光公へ会津に一味を思ひ寄ん事を呼